

平成29年度小松市立中海小学校 学校評価2

	目標・具体的取り組み	取組の状況（8月提出）	取組の成果と課題（3月提出）
生徒指導	<児童理解を元にした積極的な生徒指導を行う>	・職員会議に合わせる形で、児童理解の会を定期的に開催している。全教職員で情報を交換し、児童に対する理解を深めることができた。スクールカウンセラーや心の相談員の日誌も職員間、特に学級担任の間で共有できるようにしていく。	・毎月の児童理解の会に加えて、スクールカウンセラーや心の相談員、特別支援教育地域サポート教員の日誌を職員間で共有することで、児童理解をより深めることができた。
	・児童理解の会を定期的（月1回）に開催し、個や集団に応じた対応等の共通理解を図っている。 ・スクールカウンセラーと連携し、自己有用感を高めるグループエンカウンターを年間5回（1学期2回、2学期2回、3学期1回）行う。	・グループエンカウンターはどの学年も1学期中に2回を達成することができた。スクールカウンセラーにも参加していただき、相談室を利用している児童の学級の中での様子や他児との関わりを知っていただく良い機会となった。	・グループエンカウンターはどの学級も年に5回行うことができた。今後も児童の居場所を作る取り組みとして続けていきたい。
特別支援教育	<困り感のある児童を把握し、その特性に応じた具体的な教育支援体制の充実をめざす>	・4月の年間計画に沿って児童理解の会開催を合わせて全体会を実施している。特別支援を要する児童に学校全体としてどう関わればよいか、確認する場としている。	・児童理解の会開催と合わせて、支援全体会を実施してきた。計画的に児童理解の会が設定されていることから、抜けなく行うことができた。
	・年間4回の支援全体会を、計画に沿って実施する。 ・個別のケース会議を適宜実施する。	・個別のケース会議は適宜実施することができた。これまで7回のケース会議をもち、外部機関とつながることができた。今後も保護者との連携を大切に、児童の支援体制を整えたい。	・職員同士の声の掛け合いで、適宜個別のケース会議を実施することができた。これまで10回のケース会議をもち、その時の児童に合わせた対応を練ることができた。
道徳教育	<道徳の授業を中心に、教育活動全体を通して道徳教育の充実を目指す>	・年間指導計画に基づいて「わたしたちの道徳」、「いしかわ版道徳教材ふるさとがはぐくむどうとくいしかわ」の活用ができた。夏休みは、映像資料集の活用も推進するため、職員室でDVDを流す時間を作る予定。	・夏休みに「いしかわ版道徳教材ふるさとがはぐくむどうとくいしかわ」の映像資料集を紹介した。また、年間指導計画に沿って授業を実施することができた。教科化に向けて、新しい教科書を使用した年間指導計画と別業の作成も進めることができた。豊富な地域人材を生かした道徳の授業を今後の課題としていきたい。
	・「わたしたちの道徳」、「いしかわ版道徳教材ふるさとがはぐくむどうとくいしかわ」を活用する。 ・ねらいの明確化、中心発問の工夫、資料提示の工夫、板書の工夫、地域人材の招聘など、指導法を工夫した授業を、どの学年も学期に2回以上行う。	・とくにねらいの明確化、資料提示の仕方において指導法を工夫することができた。2学期に授業構想を立て、ねらいに迫る中心発問を考える道徳についての研修会を行う予定。	・教員向けに道徳通信を発行し、授業づくりや道徳ノートの交流、振り返りの仕方について校内研修を行ったり、指導主事を招聘し研修会を開催したりすることができた。今後、指導法を工夫した授業後の板書や教材教具の共有を図っていきたい。
読書教育	<読書の質的・量的な向上を図り、読書教育の充実を目指す>	・「おすすめ10冊」のうち1学期の目標冊数を読んだ児童は、全校の87%であった。まだ目標冊数が読めていない児童については、夏休みに読むように働きかけ、2学期明けには全員が目標を達成できるようにしたい。	・「おすすめ10冊」のうち2学期の目標8冊を読んだ児童は、全校の77.7%であった。中間より10%減少はしたが、ほとんどの学年が8割を達成できた。まだ目標冊数が読めていない児童については、3学期の週末読書や家族読書などで読めるよう働きかけたい。
	・「本のとびら」「この本読もう」を活用し、様々なジャンルの本に触れ、読書の幅を広げる。（学期ごとの達成度） ・借りる本のうち1冊は読み物（絵本を含む）に限定し、読書の質的な向上を図る。 ・夏期・冬期休業中、いしかわ学校読書の日に加え、週末・祝日の前日にも3冊まで借りられるようにし、読書量の向上を図る。（目標冊数・目標ページ数）	・1学期の貸出冊数が目標冊数を超えた児童は、全校の76%であった。中学年以上で、意識して読み物を借りる児童が増え、読書の質的な向上につながった。 ・全体として昨年度よりも貸出冊数が減少した。原因として、選ぶ本を読み物の本を1冊以上と限定したこと、司書の先生が常駐ではなくなったことが考えられる。2学期は、読書量が増えるような取り組みも考えていきたい。	・2学期の貸出冊数が目標冊数を超えた児童は、全校の74.3%であった。学年間の差が大きく、中間より1.7%の減少となった。読み物を1冊以上選ぶことは定着したようだが、借りる冊数で個人差が大きく、もっと声かけが必要であった。 ・今年度から、1,2,3学期毎に目標冊数を決め、スモールステップで取り組んだことは効果があった。ただ、学年間の差が大きかったことと、あまり読まない子への手立てがもっと必要だったことは課題である。
保健健康教育	<望ましい生活習慣等の定着を目指す>	・健康チェック/毎週火曜日に各教室で確実に実施されている。1学期末に家庭に持ち帰り保護者にも確認してもらった。	・健康チェック/毎週火曜日に各教室で確実に実施されている。
	・健康チェックを毎週火曜日に行う。 ・早寝早起きの取り組みを行い、できる児童を60%以上にする。 ・ミニ健康指導を年間4回実施する。	・早寝早起きの取組結果について/早寝ができたか、のアンケートではできた・まあまあと答えた児童は77.3%、保護者は70.3%であった。学校の集計では（しゅれんじ取組期間5日間）64%であった。達成できなかった児童の中にはもともと早寝の習慣がついている児童がおり、目標は達成できなかったが実際は早く寝ている児童もいた。家庭における早寝のめあて時間はそれぞれ考えが違い、5日間の集計のため毎日の様子までは把握できていない。今後、児童・保護者に各学年に必要な睡眠時間を知らせるとともに、寝る時間の設定について見直すようにおたよりや担任から呼びかけていく。しゅれんじ期間に合わせて早寝取組の継続と、学校保健委員会で早寝を啓発する等、児童だけではなく保護者も共に生活習慣改善に向けて意識を高める必要がある。 ・ミニ保健指導/1学期2回実施。2学期1回、3学期1回の予定	・早寝早起きの取組結果については、児童・保護者ともに7月より下がったが、60%以上ができたことと答えた。学校保健委員会では、「朝食について考えよう」をテーマに早寝・早起きにもふれ話題提供したが、意識の向上の持続は難しく、下校後の習い事の関係や家庭全体での生活習慣の意識の薄れ等により、結果は悪くなった。家庭における生活リズムや早寝のめあて時間はそれぞれ考えが異なるため、今後も引き続き児童・保護者には必要な睡眠時間や健康や学習面への影響を知らせるとともに、寝る時刻の設定について見直すよう呼びかけていく必要がある。また、しゅれんじ期間に合わせての早寝取組の継続と、保護者に向けても家庭全体で生活習慣改善の意識を高める必要がある。学校保健委員会では、保護者の希望も取り入れながら生活習慣に関する話題を設定していきたい。 ・ミニ保健指導/1学期2回、2学期1回実施、3学期1回の実施。
体育教育	<年間を通して体力向上の取組を推進する>	・握力を鍛える運動や柔軟運動は、取り組んでいると答えた先生は全体の25%、まあまあ取り組んでいると答えた先生は37.5%、あまり取り組んでいないと答えた先生は37.5%だった。全体で確実に取り組むための工夫が必要だと感じた。運動例をいくつか紹介し、学年に応じて取り組んでもらいたい。また、運動の仕方を掲示し、児童の運動意欲も高めていく。	・「体育授業の始めに握力を鍛える運動や柔軟運動を取り入れる」という項目の達成率は全体の71.4%であった。確実に取り組むための工夫が弱かったように感じる。定期的に呼びかけ、全体的に意識を高めることが必要であった。
	・体育の授業の初めに握力を鍛える運動や柔軟運動を取り入れる。 ・外遊び週間、なわとび大会など各種スポーツ行事を年間4回実施する。 ・スポチャレの40m、8の字跳びに全クラス取り組む。	・体育委員を中心に外遊び週間、しゅぼり大会を企画・実行し、スポーツ行事を2回実施し、児童は楽しく体力向上に取り組むことができた。今後はスポチャレ大会や縄跳び大会を予定。 ・スポチャレ40mに取り組んだが、提案時期が遅く6学年中5学年が達成、全クラス達成とはいかなかった。余裕をもち、早めに提案する。2学期は、8の字跳びに取り組む予定。	・体育委員会を中心に、11月にドッジボール大会、12月にイス島大会、1月に大縄大会と、活発にスポーツ行事を行うことができた。縦割り班で年間5回のスポーツ行事を実施し、児童は教え合い、協力しながら体を動かすことができた。 ・余裕をもってスポチャレの提案したこと、各学年の8の字跳びの結果を体育館に掲示目に見える形にしたことで、全学年が意識を高くもって取り組むことができた。「記録の多い学年に跳び方のコツを教えてもらいたい」と、児童は積極的であった。
家庭・地域社会との連携	<信頼される学校づくりに努める>	・自然豊かで、地域の人材もたくさんあり、2年生以上の学年は1学期に1回は、総合や生活科などを通して地域の方を招いたり、地域の教材を使ってふるさと学習を行うことができた。1年生は2学期以降行う予定をしている。しかし、児童はふるさと学習に意欲的に取り組むが、地域の協力体制が整いすぎて主体的に課題意識を持って取り組んでいるか、という点では大人に任せすぎる面も多く見られた。教師がねらいを明確に持って、外部との打合せを綿密に行っていくことが大事である。	・ふるさと学習は充実した地域の教材を生かして、計画通り取り組むことができた。5、6年生も、小松のふるさと学習をユニットで行うことができた。今後は豊富な地域人材をゲストティーチャーとして道徳等でも活用していきたい。
	・総合的な学習、道徳、体験活動を通して、地域の自然、文化、人々について学ぶふるさと学習を各学年2回以上取り組む。 ・ホームページ、学校便り、学級だよりなどの学校からの情報発信を積極的にいき、家庭、地域との連絡や協力を密にし、連携に努める。	・保護者アンケートでは、A+B評価が93.8%であったが、「ホームページがあまり更新されていない」との少数意見もあった。情報担当、教務、管理職と連携し開かれた学校を目指し、情報発信に努める。	・保護者アンケート「学校は、ホームページ、学校便り、学級便りなどで情報発信を積極的にしていますか」の項目で、7月と比べ+5.4ポイントで99.2%であった。
学校関係者評価	【8月】 ○全体として ・細かい分析をしている。客観的に評価できる。 ・地域性や子どもの環境がとても影響が強い。 ・教職員が課題にしっかり対応している。 ○学力について ・この地域の子はおとなしい子が多いので、学校の取組であるスピーチ大会等のような自信を持たず取組みはもっとやってほしい。 ・子どもに学力をつけさせるための授業（点数に表れる授業・自信をもって自分の意見を話す授業）をしっかりやってほしい。 ○生徒指導・特別支援教育について ・自転車のきまりなど、保護者は学校に作ってほしいと言うが、ルールは家庭で決めることである。子どもには危険を経験させて、安全にできる力を付けることが大切である。 ・特別支援教育の大切さ等、共通理解が必要である。 ○家庭・地域との連携について ・小中連携や小保連携はしっかりできている。これからはいつでも受け入れるという自然な流れで行いたい。 ・緊急の場合、メールの他に、町内放送を利用している町がある。学校からできない。緊急事態の時は家にある65歳以上の力が必要になってくる。岩瀬町はその体制ができている。 【2月】 ○学校評価Ⅰについて ・地域の特性として競争心があまりない。学が意欲の向上や自己肯定感の向上の取組を少人数のよさをいかして進めてほしい。 ・活用力をどう育てていくか。昔は、遊びの中で育ったことが、今は帰ってから遊びにいかないので、そこも違う面である。与えすぎなため、待つ子が増えている。底上げも大切だが、上位層を引き上げることも必要。 ・複数体制でできることはいいこと。自分たちの頃はなかった。ちょっとしたきっかけがあるとできるようになることもあるので、これから期待できる。 ○学校評価Ⅱについて ・いじめ問題はいつの時代でも起こりうることだから、その都度しっかり対応していく。 ・自分たちの時代も道徳があり、教科書があったと思う、という意見があったので、道徳の教科化の説明をした。 ・握力が弱いとあるが、柔軟、体幹を鍛えた方がよいのではないかと、自分たちだけで何かしようとしなくて、リーダー性を育てていく必要がある。 ○その他 ・大雪の時、雪かきをしている子どもの姿をよく見た。今まで見たことがない光景でいい姿だった。 ○学校側から ・机、椅子の脚にテニスボールをつけたこと、新メール配信システム、スクールバスの下校対応、来年度の外国語活動の時間が1時間増える（3年生以上）ため水曜日を6限とすることの説明をした。		